

はじめに	第1部 観光客の哲学 第1章 観光	附論 二次創作	第2章 政治とその外部	第3章 二層構造	第4章 郵便的マルチチュードへ	第2部 家族の哲学 第5章 家族	第6章 不気味なもの	第7章 ドストエフスキーの最後の主体
------	----------------------	------------	-------------	----------	-----------------	---------------------	------------	--------------------

これは著者が著者のために書いた本である。

結論：「誤配こそが社会をつくり連帯をつくる。だからぼくたちは積極的に誤配に身を曝さねばならない。」 P009

## 第1章 観光

1. 本書での観光とはあくまでも哲学的な記述、「概念」であり、産業の実態ではない。扱う問題は他者である。他者の代わりに観光客という言葉を使うことで新しい（他者の）哲学を構想する。

2. 貴族の修身として行われていたヨーロッパ各地の旅を、民衆レベルで行ったものが観光のはじまりである。黎明期を語る上で欠かせないのがトマス・クックという実業家。ツアーの行き先では観光客の無教養、粗野が嘲笑の種になったが（今の中国人観光客を笑う図と重なる）、クックはむしろそれを目標にしていた。彼は観光を通じて大衆を啓蒙し、社会を良くできると考えた人物であった。しかし、観光学や学者は21世紀になっても観光の本質について考えていない。それどころか資本主義と深く結びついた観光のダイナミズムについてもいいところを見つけれられていない。にもかかわらず世界は観光客に覆われつつある。なぜか。

3. 観光客を考える上での3つのねらい  
①グローバリズムについての新たな思考の枠組みをつくる  
世界は急速に均質になりつつある。どこの国に行っても同じ広告に出会い、同じようなものを食べる。このような「フラット化」の哲学的な意味を問う。

②必要性（必然性）からではなく不必要性（偶然性）から考える枠組みを提示する  
観光客の出現は、ベンヤミンが目撃した遊歩者（パサージュと呼ばれる商店街建築をうろうろと見て回る人々）が現れたのと同時期であり、二者のふるまいはよく似ている。観光客にとっては訪問先の全ての物事が商品・展示物であり、無為なまなざしの対象となるわけだ。観光客は、旅行先で見るとははずのなかつたものを見、知り合うはずのなかつた人々と対面するのである。

③「まじめ」と「ふまじめ」の境界を越えたところに、新たな知的言説を立ち上げたい

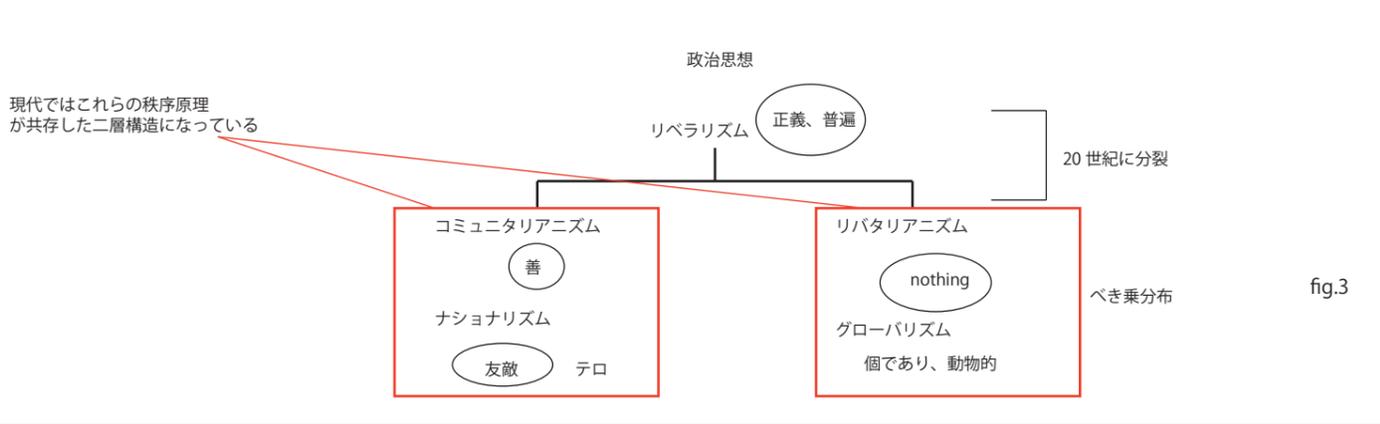
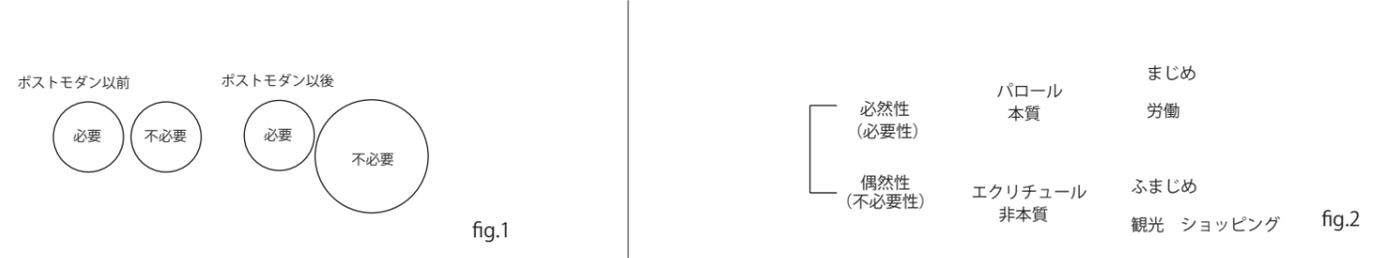
テロは「まじめ」な問題か？

## 第2章 政治とその外部

シュミット、コジェーヴ、アーレントの三人は、十九世紀から二〇世紀にかけての大きな社会変化のなかで、あらためて人間とはなにかを問うた思想家である。そこでシュミットは友と敵の境界を引き政治を行うものこそが人間だと答え、コジェーヴは他者の承認を賭けて闘争するものが人間だと答え、アーレントは広場で議論し公共をつくるものこそが人間だと答えた。答えはいっけん三者三様だが、彼らが人間と対比したものを考えると、共通の問題意識が浮かび上がってくる。それはグローバリズムと共に現れた、"ジャンクフードと娯楽に囲まれ、政治も芸術も必要とせず、提供される新商品に快楽を委ねているだけの消費者は、生物学的に生きていようと「人間」ではない"、という認識である。言い換えれば、彼らはみな、グローバリズムが可能にする快楽と幸福のユートピアを拒否するためにこそ、人文学の伝統を用いようとした。ここでグローバリズムと対置されるのが、ひとりの自分ではなく、より大きな概念（国家や共同体など）に精神的な拠り所を持ち、連帯すること、成熟することを求めるナショナリズムである。著者はこの二項対立が相反するものではなく、現代の国家では両方が重なり二重構造になっていることを指摘する。そして観光客は、「個人から市民へ、国民へ、そして世界市民へ」という単線的な物語から外れている。それゆえに近代思想の枠組みでは原理的に政治の外部として扱われるが、著者はふわふわした存在であるところの観光客という概念を通してこそ、新たな政治の回路を見出せるのではないかと考えている。

## 第3章 二層構造

ネグリとハート（『帝国』2003年刊）という思想家の提唱したマルチチュードという概念を用いて、個人ではなく、国家でもなく、かつてのマルクスのように階級でもない第三の概念へのアイデンティファイを試みる。マルチチュードの前に、書名にもなっている『帝国』についての説明が必要である。ネグリとハートは、国民国家は経済的・文化的な交換をもちや支配下に置けず、新しい秩序が発生している、村落や都市の延長として国民国家を考えることはできないとし、これを国民国家の体制から『帝国』の体制への移行だと指摘した。（前述の一極集中=優先的選択の集合体でもある）そして、この体制への反作用として内部で生まれる『帝国』の秩序そのものへの抵抗運動を、彼らはマルチチュードと呼んだ。要は反体制運動や市民運動のことだが、かつての運動と異なり、グローバルに広がった資本主義を拒否せず、むしろ利用する（インターネットの情報収集や動員、企業やメディアとの連携など）。このマルチチュードの概念はイデオロギーを失った冷戦後の抵抗運動に熱狂的に受け入れられた。実際にアラブの春やNYのウォール街占拠などの運動の様子をびたりと言い当てており、マルチチュードの成功例とされている。しかし著者は、これらの運動はどれも決定的な力を持たず、結果的には口マンでしかなかったこと、そして、マルチチュードは生成の過程が説明されず、ただ反作用としてしか扱われないこと、また、その抵抗において、抵抗運動の意味内容は鑑みられないのに、抵抗運動は連帯していく――つまり連帯も、連帯の理由も存在しないのに連帯することになっている――無から連帯が生まれている、ことを指摘する（こういう思考回路を否定神学的と言う）。ここで著者は19年前の著作である、『存在論的、郵便的』を引きながら、否定神学的な思考を更新する。



## 第4章 郵便敵マルチチュードへ

神は存在しないが、存在しないという空白によって存在する。この否定神学的な思考を更新するのが、「郵便的」な捉え方である。これは、神はとりあえず存在しないが、現実の様々なエラーによって、あたかも存在しているかのような効果を及ぼす、というもの。このエラーを誤配と呼び、郵便になぞらえて表現している。観光客は、誤配や前述の「つなぎ替え」に満ちた存在である。画集など一度も見たことのない人間がルーブルでモナリザを見る、自分で料理も作ったことがない子供がパリの屠殺場を見学する。彼らが正しく見たものを理解するなどありえず、誤解に満ちてはいるが、まさにその「誤配」こそが新たな理解やコミュニケーションに繋がる、それが観光の魅力でもある。人が誰かと連帯しようとする、それはうまくいかない。けれどもあとから振り返ると、何か連帯らしきものがあつたような気がしてくる。そしてその錯覚が次の連帯の（失敗の）試みを促す――これが著者の考える観光客 = 郵便的マルチチュードによる連帯の姿である。

21世紀の新たな連帯は、「帝国」を外部から批判するでもなく、内部から脱構築するでもなく、いわば誤配を演じなおすことである。出会うはずのない人に出会い、考えるはずのないことを考え、「帝国」の体制に再び偶然を導き、集中した枝をもう一度つなぎ変え、優先的選択を誤配へ差し戻し…。こうした実績の集積によって、特定の頂点への富と権力の集中はいつでも転覆し再起動可能であること（数理モデルでは、富や権力の集中が必然的であると同時に、集中する頂点に必然性はなく代替可能であることを示す）を常に人々に思い起こさせる。あらゆる抵抗は誤配の再上演から始まるのであり、これを観光客の原理と名付ける。

友達の友達の友達の…を六回続けると世界中の人間を網羅できるとは言うものの感覚的には想像しづらいところがある。ここでは点を人と見たてて、ある人同士が友人である場合点と点の間に線分を引く、というやり方で図を描き、人間関係のモデル化してみる。

a,b,cの図は全て点の数、線分の数が同じである。人間関係は基本的にはa図のように、友人の友人は自分の友人であるような"閉じた"コミュニティになるが、これでは多角形の反対側へ関係を伸ばすだけでも、友達の友達の…を5回使ってしまう。c図は、a図の線分を全てランダムに引き直したものだが、これも実際の人間関係を表せているとは言い難い。b図はa図の線分の15パーセントをランダムに「つなぎ替え」たものである。基本的には"閉じた"コミュニティだが、いわば、そこそこが友人同士なのか！という驚きを少し含んだ図である。友達の友達の…で全世界を網羅するために必要なのはこの「つなぎ替え」であり、ランダムな・意外な・普通なら繋がるはずのなかつた繋がりこそが人と人の連帯において重要な役割を果たしていることを指摘する。「つなぎ替え」の生み出す近道が人々を近くの三角形から遠くの三角形へ連れ出し、他者との出会いに誘う。ところが、社会の複雑さがある臨界を超えると、この「つなぎ替え」の性質そのものが変質し、「優先的選択」と呼ばれるものになってしまう。ごく簡単に説明すると、富や権力が極端に集中した点が現れると、「つなぎ替え」はもはやランダムに発生せず、点と点を結ぶ線も方向性を帯びてしまうということである。

議題

- 第一章の必要性と不必要性から建築を考えてみる。fig.2のような対応関係から見て、現代建築家の思考はどちらに偏っているか
- 第三章では二層構造について説明している。建築において二層構造になっているものはあるか。
- 4章での「つなぎかえ」のような偶然性による社会モデルは建築に置きかえるとどのような例が挙げられるか
- 観光客は責任を持たない、または存在しないものとして存在しているという点で郵便的である。観光客が増えて、ますます人々が世界を消費するようになると文化や歴史はただの記号にしかならなくなってくると思う。そういう問題を建築家はどのように考えているだろうか。またあなた方がどう考えますか？